法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

物狂能の系譜(一九六七年度法政大学国文学会総会研究発表要旨)

西野, 春雄

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
18
(開始ページ / Start Page)
50
(終了ページ / End Page)
54
(発行年 / Year)
1967-10-20
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019195

けるついてによみたりける (C)すみよしのきしのひめまつ ひとならはいくよかへしと とはましものを とよめるにおきなのなりあし きいてゐてめてゝかへし (D)ころもたにふたつありせは あかはたの山にひとつはか さまし物を

この表のように、伝為氏本は広本系（阿波本で代表させますが）よりも簡略な本文をもっています。しかも、40段の阿波本の［　　］部分が文脈の上からみても、その混入が不合理であることが明らかでありますように、簡略な方が純粋なよさをもっております。101段の阿波本の［　　］部分も明らかに後人の注記とみるべきものでしょう。最後の117段の阿波本の(C)(D)の二首についても、後人の『古今集』によっての添加と考えられます。

ところで、広本系とこの伝為氏本とでたいへん位置の違います88段について、ちょっといい添えたいと思います。広本系は、たとえば大島本を例にとりますと、

むかしいとわかき人にはあらぬこれかれともたちとものあつまりて月をみてその中にひとり
あちきなし月をもめてしこれそこのつもれは人のをいとなるもの

とありますが、この本の方は、

むかしいとわかき人にはあらぬこれかれともたちとものあつまりて月をみてそれかなかにひとり
おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人のをいとなるもの

となっています。『古今集』巻十七のこの歌がやはり「おほかたは」でありますのを思い合わせても、伝為氏本の本文の古さ・確かさが推測できます。

以上申しあげましたように、この新しく発見されました伝為氏筆本『伊勢物語』は、百二十五段本系統の本文と比べましても、より古いよい内容をもち、広本系の本文と比べましても、同様であります。文章の純粋さ、配列の順序等、この本こそ現存両系統本のいずれよりもなお古い、原初形態を存している貴重なものと考えざるをえません。それで、いずれ複製本およびその解説において詳細をみていただくこととし、まず概略を御報告いたしたかったのであります。

（筆記責　益田勝実）

物狂能の系譜

西野春雄

一

「此道の、第一の面白尽くの藝能なり」とは、『風姿花伝第二物学

条々・物狂』における冒頭の一節である。世阿弥は、物狂こそが能の中で最も面白さのかぎりを尽くした芸能である、と規定しているのである。さらに続けて、物狂は種類も多いので、物狂において義を極めた達人は、すべての風体に通ずることができるだろう、とも言っている。

一体、この面白尽くの能である物狂能は、どのような特徴を持ちその面白さは、どこに求められをのか。さらに物狂能は種類が豊富であり、物狂能の達人は、すべての風体に通ずること可能、とする世阿弥の発言から、逆に物狂能と他の風体との間には、何か関連があるのだろうか。私の意図は、物狂能の特徴と面白さについて考察し、それらに立脚して物狂能の源流を探り、それがどのような歴史を描いていったか、即ち、物狂能の系譜を跡づけることにある。

二

物狂能には、「都の人といひ、狂人といひ、面白う狂うて見せよ（隅田川）」とか、「面白う狂うて舞ひあそび候へ（花筐）」のように、ワキなどが物狂に向って「狂ひ」を要求する形式が多い。「狂ふ」という詞は、能や羯鼓や曲舞などの芸能を演じて、舞い、歌い、狂言することであり、世阿弥伝書の用例から帰納すると、烈しく強々と動きまわる意味でもある。従って、物狂（狂人）とは、狂いを演じてみせる一種の見世物であり、中世に盛んであった曲舞舞や白拍子などと同様、歌舞遊芸者のことである。それゆえ、いかに精神的狂気を思わせる物狂でも、根本の歌舞遊芸者の意味に変りはない。従って、物狂の主眼は物狂の狂うさま、舞いぶりにあるといっても過言ではあるまい。（補注1）

三

花伝第二物学・物狂において、世阿弥は、物狂能を次の二つに分類している。一つは「憑き物故の物狂」であり、一つは「思ひ故の物狂」である。前者は、神・仏・生霊・死霊が憑いて狂う物狂で、たとえば「卒都婆小町」や「歌占」などがこれに当たる。後者は、「親に別れ、子を尋ね、夫に捨てられ、妻に後るゝ」などの、心の物思いが昂じての物狂で、「柏崎」「三井寺」「隅田川」など、現行の物狂能のほとんどすべてが含まれる。

この世阿弥の分類は、何が原因で物狂になったかということ、つまり物狂の性格が基準であるといえよう。しかし、この分類に先行して、物狂能には、まず男物狂と女物狂の二つがある、という大前提を見落してはなるまい。

物狂能の特徴　一体、何が物狂の特徴であろうか。面白さは、どこに求められるのか。これらについて、㈠素材、㈡構成、㈢眼目の三つの観点から考えてみることにしよう。

㈠素材　たとえば「丹後物狂」の、岩井某が子を失って物狂になった話や、説法の上手な少年僧の話というように、いわゆる世話巷説がほとんどである。その上、大部分が親子再会の世話物語を素材としており、このことから、世阿弥の言う儀理的要素（戯曲的筋立・劇的内容）を多分に含んでいるのが、物狂能であるといえよう。

㈡構成　概して前後二段の形式をとっている。即ち、物狂となるきっかけの事件を描く前場と、物狂が登場して、その狂いぶりを見せる後場とに分かれるのである。しかも、この二段構成は古作の能

に多く、「丹後物狂」や「柏崎」などは本格的大構成の能といえる。だが、時代が下るにつれて、二段構成から一段構成（前半・後半）へと移行していくのがみられる。後の作品になるに従い、物狂となるまでの事件を描く前場を省略してしまい、いきなり物狂の登場となる。即ち、なぜ物狂になったかを、物狂自身に語らせることで狂いの原因を観客に知らせるのである。世阿弥晩年頃の作と思われる「多度津（ただつ）」がそうであり、内容はともかく、形式上では、元雅作の「隅田川」もこの形である。考えるに、この傾向は物狂能の主眼がシテの芸尽しにあることの強い反映であろう。なぜならば、シテの芸尽しを第一とすれば、前段をていねいに描く必要がなくなってしまうからである。

㈢眼目　「恥をさらし、人目を知らぬ事なれば、是を當道のふし物に入るべき事はなけれども」（拾玉得花）という物狂を登場させる意味は、何よりも、物狂の芸尽し〈狂い〉を舞台に再現することにある。(補注2)従って、物狂能の主眼も、実にこの点にあり、シテの舞いぶり狂いぶりがそれである。それゆえ、ストリーが親子の再会にあっても、それに重点があるのではない。極言すれば、親子の生き別れは狂わせるための手段であり、再会は結末へ導くための筋道である。具体的な芸尽しを次に示すと、

イ説法…物まねの好対象　「丹後物狂」
ロ問答…一種の秀句芸・話術芸
・宗教問答……「卒都婆小町」
・女人禁制への抗議……「柏崎」
ハ曲舞…歌舞の世界
・李夫人の曲舞……「花筐」
・地獄の曲舞……「歌占」
ニ羯鼓・簡・八撥…遊狂の世界　「自然居士」

などであろうか。以上を見せ所、聞かせ所に配し、それが主眼でもある物狂能。それゆえにこそ世阿弥をして、「此道の、第一の、面白尽くの藝能なり」と言わしめたものと思われる。

四

今日、物狂能といえば、大概、狂女物を指す場合が多い。このことは、物狂能が狂女物と同義語的に使われている傾向を示していよう。そして、この傾向は曲数の上では勿論のこと、内容的にも、女物狂が男物狂を圧倒していることの反映と考えられる。一体、この現象はどうして起ったのか、果して、観阿弥や世阿弥時代もこの通りであったのか。さらに、今日「憑き物故の物狂」が皆無に近い状態は、どう考えればよいか。また、物狂能は種類が豊かであり、奥義を極めた達人はすべての風体に通ずることが可能とする世阿弥の発言には、物狂能と他の風体との間に、何らかの連関が求められるのではないか。換言すれば、物狂能の歴史がそのあたりに探られるのではないだろうか。以上の諸点から、私は物狂能の源流を求め、その歴史を想定してみようと思う。

A　原初的物まね——憑き物故の物狂

世阿弥の分類でいう「憑き物故の物狂」（例、卒都婆小町）が、物狂能の中でも、比較的早い時期に作られたと私は考える。なぜな

らば、この種の能は、その憑き物の物まねが一曲の主眼であることは言うまでもないが、この憑き物の物まねを演ずること自体が、最も物まね的であるからである。つまり、最も物まね的であることは、能の原初形態である「さるがうわざ」と、ほとんど近いからである。たとえば、神がかりの状態をまねてみせるとか、深草の少将の百夜通いの物まねを演じてみせるなど、素朴な物まねを想起させる。この素朴な物まねが、次第に能の物まねとして、歌舞に対する劇的演技の意味に定着していったものと思われる。だが、最も古い形式とみられる「憑き物故の物狂」が、今日なぜ皆無に等しいか、という疑問は依然として残る。これについては次のように考えている。即ち「憑き物故の物狂」から「憑き物」そのものを舞台に再現させる方向へ移行したのではあるまいか。一例を示すならば、女に鬼が憑いて狂う物狂能の時、鬼らしく見せようとすると、舞台的美しさに欠け、女らしく演ずると、鬼の本意が失なわれてしまう。これは「所詮、これ体なる能をばせぬが、秘事なり。能作る人の、料簡なき故也」と世阿弥が注意する点でもある。この矛盾に落ち入らぬ方法として、憑き物である鬼を独立させ、鬼能へ変化していったと考えるのである。

B　儀理能から物狂能へ

男物狂が直面の物狂であることに注目するならば、物狂能の源流を「儀理能（劇的筋立の能）」に求めることができるのではないだろうか。具体例をあげるならば、儀理能「刈萱」が物狂能の「高野物狂」へと転換していったと考えたい。この二曲は、ともに高野山を舞台とする、父と子、養君と従者の再会の話であり、極めて類似の素材である。さて、この想定の根拠は、(イ)シテが直面で登場すること――これはシテが神や霊ではなく、生きた現実の人間であることを意味する。このような人物をシテとする能こそ、世阿弥の言う「物まね、儀理を本とする」のに最もふさわしいものと思われる。(ロ)筋の面白さを儀理能の眼目とするならば、山場の設定が必要となる。その山場には「感と面白き見所」が不可欠であるが、「面白き見所」即ち花やかさが、劇進行のための重要な部分として劇中に組み込まれた場合は、その効果は大きい。その花やかさを狂いによって生み出そうとするのが物狂能であるとすれば、ここに、単なる筋立本位の儀理能から、歌舞を一開聞開眼」とする物狂能へ転換していく過程が、想像されるのである。

C　歌舞・風流から物狂能へ

喝食物と呼ばれる「自然居士」や「花月」は古作と考えられるが、このような喝喰物から物狂能ができたのではないだろうか。つまり儀理と歌舞の組み合わせが喝食物や芸尽し物と呼ばれる一群を作り出したとみる。観客の心をときめかせる歌舞・風流（ふりゆう）の世界。それが喝食物の主眼であり、物狂能の遊狂的雰囲気は、喝喰物の歌舞・風流を強く受け継いだものと考えたい。

以上を整理すると、私は物狂能の源流を探るにあたって、一方に儀理能から物狂能への転換を推定し、他方に歌舞・風流から物狂能への変化を想定した。いづれにしろ物狂能は、たとえるならば、物まね・儀理を父とし、歌舞・風流を母として生まれて来たのではないかと考えるのである。従って、物狂能の中には劇的把握の能と、

歌舞的把握の能、及びその中間に位置する両者融合した劇的かつ歌舞的把握の能の三つの類型が指摘できる。また、劇的把握の物狂能は概して古作の男物狂に多く、歌舞的把握の物狂能は、ほとんどの狂女物に著しい。ということは、物狂能の中に劇的なものから歌舞的なものへの発展を推定することもできよう。この流れを雄弁に物語っているのが、『申楽談儀』（能書く様・その一）の次の記事ではあるまいか。

丹後物狂、夫婦出でて、物に狂ふ能也し也。幕屋にて、にはかに、ふと今のやうにはせしより、名有能となれり。

始めは夫婦で出る能を、ある日世阿弥が、楽屋でふと思いついて今日のように父親だけが出る形に改めたところ、好評を博した、とある。夫婦一緒に出すと、どうしても儀理的要素が残るので父親だけにした。その結果、儀理的要素は薄れるが、逆に歌舞的要素は強まる。それがよく受けたのであるから。

さらに注目したいのは、母親でなく父親を出して好評を得たことである。なぜならば、この時期が男物狂の全盛ではなかったかと思うからである。その時期は恐らく世阿弥の時代ではあるまいか。事実男物狂のほとんどが世阿弥の頃に作られているようである。しかし、歌舞を重視する傾向が世阿弥の二曲三体論の頃（応永二七年）から著しくなって来ており、その結果、歌舞にふさわしい人体に限られ、女物狂が圧倒的に多くなっていったと思われる。以上の考察からも明らかなように、世阿弥の時代は儀理が著しく後退し、歌舞が大きく進出するという、一つの変革期ではなかったかと、私は考えている。

補注

(1) 世阿弥は物狂能をどのように考えていたのか、それと作品との関連はどのようであるかは、本稿の主題の一つでもあるが、世阿弥の物狂論の骨格を知る上に重要なもののなかで伝書に現われた物狂論の概略を次に示しておこう。

世阿弥の物狂能に対する基本的姿勢は、『花伝第二物学・物狂』に明らかであり、これこそが物狂論の出発点である。以後、『至花道』の二曲三体論の物狂の位置づけは、その発展といえるし、晩年、禅竹に相伝した『拾玉得花』の物狂論は、「申楽事」の論として大いに注目すべきだろう。以上は主に物学論の立場からだが、能作論の上からは、『三道』の放下があげられる。右の概略のなかで詳論は省くが、一つだけ指摘しておくなら、二曲三体論において、物狂能を軍体の応用風とする点である。軍体の用風には、物狂能と並んで鬼能があり、いづれも身動足踏の生曲、身を烈しく働かせ、足を高く踏む、生気躍動する曲である。つまり、ここにも「狂ふ」というイメージが強く作用しているのである。

(2) 又、物狂なんどの事は、恥をさらし、人目を知らぬ事なれば、是を當道のふし物に入るべき事はなけれ共、申楽事とはこれなり。女なんどは、しとやかに、人目を忍ぶものなれば、見風にさのみ見どころなきに、物狂になぞらへて、舞を舞い、歌を謡いて狂言すれば、もとよりみやびたる女姿に、花を散らし、色香をほどこす見風、是又、何よりも面白き風姿也。然者、この位を得たる為手は、上花なるべし。是、面白き我意分也。（拾玉得花）